『青鞜』から「アフガニスタン女性警察官支援プロジェクト」へ

From Seito to The Afghan Women Police Officers Support Project

池川　玲子

明治後期、私の故郷愛媛県今治から一人の女学生が日本女子大学に進んだ。卒業後、彼女保持研（白雨）は同窓生たちとともに『青鞜』を創り、事務方として平塚明（らいてう）を支えた。歴史の暗がりに隠れたその姿をやみくもに追いかけはじめたのが三十才間近の時。所属機関はなく資金もなく知り合いすらいないという徒手空拳のスタートだったが、行く先々で人に出会い、人に助けられながら、近現代日本女性史という研究の沃野で四十年を過ごしてきた。

折井美耶子氏に誘われた「らいてう研究会」では、在野ならではの共同研究の楽しさを知った。ノン・アカデミックな会員たちが手分けして『青鞜』メンバーの人生をブルドーザー式に調査した『青鞜人物事典』には、保持の事蹟を記録することができた（研究会は2005年に第一回平塚らいてう賞特別賞を受賞）。

皮肉なことに、この編集作業を通じて見えてきたのは、大正デモクラシーの時代に女性解放を訴えた女たちが、十五年戦争時代には戦争翼賛体制に組み込まれていくという図式だった。この図式を解くべく入学した川村学園女子大学大学院では、若桑みどり氏から、ジェンダー分析と表象分析の両面から歴史に切り込むことの重要さを叩き込まれた。博論のテーマは日本初の女性監督が満洲映画協会で撮った農業移民プロパガンダ映画。研究成果は『「帝国」の映画監督 坂根田鶴子』（吉川弘文館、2011年）にまとまり、学部時代の母校東京女子大から女性史青山なを賞を受けた。

坂根研究を通じて行き着いたのは、帝国主義の枠内で女性が自己実現を追求することが他民族抑圧に繋がる構造を分析するための概念「帝国のフェミニズム」である。加納実紀代氏から参加を促された「敬和学園大学戦争とジェンダー表象研究会」では、この概念について、ドイツ、中国、アメリカ、イギリス、日本のケースを比較しながら考えるという得難い経験を積ませてもらった。

ここ十年間取り組んでいる「女性警察官史」は、以上のような研究の延長線上に位置づけられるもので、目下は、現代社会におけるグローバルな治安危機と女性警察官の役割について、仲間たちと一緒に国際比較研究を行っている。とりわけ、多くの国がさまざまな形で参画したアフガニスタン女性警察官への支援プロジェクト（2002~2020年）は、国際協力とフェミニズム、復興支援―被支援関係が作るジェンダー表象、実力（軍事力）組織への女性参入と「ガラスの天井」（もしくは「ガラスの崖」）といった巨大な問題群をはらんでいる。アメリカ主導の「アフガニスタン復興」そのものが水泡に帰した現在、プロジェクトの内外で生じた事象を可能な限り収集し、記録しておく必要を感じている。

私を導いてくれた三人の先達はもうこの世にはいない。しかし彼女らから受けた、両手では抱えきれないほどの学恩と人のネットワークは、今も私を叱咤し続けてくれている。

最後になりましたが、本学の森理恵先生、研究支援課のみなさまに心から感謝します。

（いけがわ　れいこ　日本女子大学学術研究員）